

書く力を養う英語科の教材および学習指導開発

松尾 砂織 村上 直子 柳瀬 陽介 檜葉みつ子

1. はじめに

英語科では、育成したい創造的思考力を、①創意工夫して何とか自分でやろうとする力、②自分の考えや気持ちを、初歩的な英語を用いながら他者に伝えようとする力、③他者とのコミュニケーションを通じて自分の表現方法を磨こうとする力、と定義した。創造的思考力は、習得した知識を活用して課題を解決する中で育成される。英語科においては、習得した知識や技能を活用して行うなどのコミュニケーション活動においても創造的思考を伴い、その思考は具体的には4技能の能力として表れる。本研究は、創造的思考力の育成を図りつつ、その結果として表れる4技能の能力の中でも、特に書く能力の育成に着目し学習指導の開発を行うものである。

書くことは、身近なことや自分のことなどを伝えるための、文字による表現活動である。また、知識や技能を総動員して取り組むことが必要な、コミュニケーション活動の中では最も高度な活動である。このような高度な表現活動を継続的に行うことで、生徒はそれまでに習得した知識や技能を十分に活用する機会を持つことができる。また、話し言葉とは違って、書き言葉は記録に残りやすいため、読み返しや書き直しが容易である。その特徴を生かして、生徒に作品を通じて他者と交流させたり、他の作品から得た考え方や表現を取り入れさせたりすることもできる。

しかし、英語力があらわになることへの恐れや、興味を持っていないなどの理由で、書く活動に対して生徒が抵抗を示すことがある。そのような抵抗を取り除くためには、グループで活動に取り組みせたり、魅力的な話題を選んだりするなど、学力差への配慮や、生徒の関心・意欲・態度を育てるための工夫が必要である。また、はじめから完成度の高い作品を生徒に求めることはせず、書くことに慣れさせることから始めて、正しい表現形式を用いた豊かな内容の作品が書けるようになるまで、段階的に目標を設定して、適切な指導をすることも必要である。

以上のような考えに基づいて、書く能力を育成するための教材および学習指導開発を行う。

2. 研究の構想

(1) 研究の目的

本研究は、先に述べたように4技能の能力の中でも、特に書くことに着目し、書く力を養う英語科の教材や学習指導法を開発することをめざしている。生徒の発達段階に応じながら、既習事項を用いて、書く活動を繰り返し学習することにより、新学習指導要領にある「身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと」といった言語活動の充実および定着を図る。

(2) 研究の方法

本年度は、これまで積み上げてきた研究をもとにして、中学校英語科における書く力をつけるための授業を計画する。実践にあたっては、書く「量」を増やすために、教科書の借用や、同じ題材を繰り返し用いて書き方を練習させることによって、書くことに対する意欲を向上させる単元・教材開発を行う。生徒の書く「量」がある程度増えてきたら、次に書いた内容の「質」に注目させ、文法・文構造を意識させながら、まとまった英文を書かせるための単元・教材開発を行うなど、段階的に研究を進める。

(3) 「書くこと」における具体的な指導方法

まとまった英文を書かせるための具体的な指導方法例を以下に示す。

- ① 一時間ごとに学習目標を提示し、学習課題に対する自身の取り組みのありかたを意識させる。
- ② これまでに継続している学習のふりかえりを継続実施し、毎授業習の終了時に、学習課題に対する自身の達成度を書きためさせる。
- ③ 既習の学習内容をくり返して指導し、基本表現の定着を図る。

- ④ 週末や行事の後、長期の休みに自分の日記や感想を書かせる。
- ⑤ ワークシートをファイルにポートフォリオ式に保存させる。
- ⑥ 学習課題に対して、学習をふりかえるポイントを提示し、学習者自身が、自分の変容と学習効果を確認できるようにする。
- ⑦ 書いた作品をグループで交流し、他者の表現に触れさせる機会を作る。
- ⑧ 海外の姉妹校に書いた作品を送り、書くことに対する意欲を高めさせる。
- ⑨ 海外の姉妹校から届いた手紙を読んで、様々な考え方や表現方法に着目させ、生徒自身の表現に加えさせるようにする。
- ⑩ 書いた作品の文構造・文法事項における改善点を示し、次に書く作品に同じミスやエラーがないようにさせる。

3. 実践事例 1

(1) 授業の構想について

① 題材について

- 単元名 Multi Plus 3 わたしの町
- 指導者 松尾砂織
- 学年 中学校 2年 40名
(男子20名, 女子20名)

○ 実施時期 平成22年11月～12月

本単元では「わたしの町」について書かれた内容を題材にして、四技能を総合的に使いながら、「書くこと」に特化した自己表現活動を行う。New Horizon English Course 2 (東京書籍)の教科書には2つのモデルがあり、ある中学生が自分の住んでいる町を外国の友だちに紹介する内容と、過去と現在の町並みの変化を紹介する内容が扱われている。いずれのモデルにも言語材料にThere is構文の現在時制と過去時制、単数と複数が出られており、書いてある英文の内容を読み取ったり、聞き取ったりする活動を通して、既習事項の定着を図ることができるように工夫されている。さらに、書いた紹介文を交流する活動を通して、発展的な言語活動ができるため、自己表現力の向上も図ることができる単元であると考えられる。

これまでの「書くこと」の指導では、生徒が何とか自分でやろうとする力、つまり書くことに対する意欲を伸ばすことを主として行ってきた。指導の成果として、生徒が書く文数は増えたものの、教科書の類似表現に留まり、表現の幅を広げる指導ができていなかった。そこで本単元の指導にあたっては、好きな場所の紹介文を書く前に、マッピングやブレインストーミン

グでイメージを膨らませ、場所の描写を具体化させてから、英文を書くように指導した。本時は、他の班の紹介文を読み、感想や意見を交流させてから、交流を通して得た意見をもとにして、紹介文を練りあうように指導した。練りあいの場面では、どのような言語材料を用いれば、より適切に、また正しく読み手に伝わる紹介文に修正できるかを考えさせ、新しい表現を書き加えることができるように指導した。

② 教材の目標

- 間違いを恐れず意欲的にコミュニケーションをする。
- There is構文の意味・構造を理解して活用する。
- 文法事項に従って、好きな場所の紹介文を書くことができる。
- 好きな場所の紹介文を相手に伝えることができる。

③ 学習計画 (全4時間)

- 第1次 町の紹介モデルの内容理解…………… 1時間
 - ・ 町の紹介モデル文の音読と町の描写の聞き取り
 - ・ 町の紹介文を書くための演習
- 第2次 校内の好きな場所について描写…………… 1時間
 - ・ 好きな場所についてのイメージマッピングと撮影
 - ・ 紹介文の作成
- 第3次 紹介文の交流と練り直し…………… 1時間
 - ・ 様々な紹介文を読み、エラーを付箋に書く演習
 - ・ 様々なアドバイスをもとに、新しい表現を書き加えながら、紹介文を再構築する (※本時)
- 第4次 紹介文の発表と交流…………… 1時間
 - ・ 紹介文を完成させる
 - ・ インディアナ大学の実習生によるネイティブチェックと音声指導

④ 授業の視点

校内の好きな場所をグループで決めて紹介文を作成し、他の班の紹介文を読んで交流する活動を通して、様々な紹介文の内容と文構成・表現方法に触れ、新たな表現を紹介文に書き加えて活用できるようにする。

(2) 授業の実際

学習過程を次の表1に示す。

表1 学習過程

学習事項	指導過程と留意点や評価・学習活動
1. 学習課題への接近	① あいさつや口頭練習を行い、英語学習への雰囲気作りをする。 ・ There is 構文や方位や位置を示す語句の口頭練習をさせて、文構造と語彙の理解を定着させる。

2. 学習課題の設定	②本時の学習課題を設定し、学習への見通しを持たせる。
3. 学習課題の追求 (班内交流)	③紹介文を読み返す時間をとり、他の班の読み手に好きな場所が正しく伝わる内容や英語表現であるかを見直すように指導する。 (留) 紹介文と写真に整合性があるか、他の班が紹介文を読むと、伝えたい内容が正しく伝わるかを考えさせる。
(グループ交流)	④他の班の紹介文を読み、質問や意見、アドバイス等を付箋にまとめさせる。 ・自分の班の紹介文に取り入れたい表現や内容があった場合は、付箋にメモ書きするようにさせる。 (留) 読む時間を設定し、グループ内での意見交流を見て回りながら、助言をしたり、文法エラーがある場合は指導したりする。
(班内交流)	⑤自分の班の紹介文に新しく考えた表現を書き加えさせる。 (評) 新たな表現が紹介文に書き加えられているか。
(全体交流)	⑥班の意見を全体で交流させる。 ・校正した紹介文を発表させる。 (留) 時間設定をし、よい表現、参考になる表現は取り上げていく。
4. 本時のまとめ	⑦本時の学習目標に対する自分の考えを評価カードに書かせる。
5. 次時への発展	⑧宿題を提示し、次時の見通しを持たせる。

添削ポイント

【文法的なミス】①～④黄色の付箋
【内容的なもの】⑤～⑦ピンクの付箋
【うっかりミス】⑧ 黄色の付箋

Group 7 清書 11月20日



We're going to tell you about our favorite place. Our school is in Mihara. Mihara is in the east of Hiroshima. It's famous for its octopus. This room is the library in our school. This library is "Toshoshitsu" in Japanese. It is on the third floor. We can read many books. We are soothed when we go there. We like the library because it is interesting. It is a big room. Thank you.

図2 生徒のグループ作品

(3) 実践結果と課題

学習過程は、表1に示す。授業の最初にThere is構文の復習として、学校内にある建物を実物提示装置で映し、紹介文を個人で考えさせた。生徒が書いた説明文を提示し、答えを共有したり、他の表現を紹介したりして、既習事項There is構文の定着を促した。次に、グループで作成した学校内の紹介文を校正する活動を行った。校正については、自分班の作品を他の班にも読んでもらい、「文法・構成・展開」について添削やアドバイスをを行った。例えば、文法エラーがあった場合は、確認のために辞書を使って正しい単語を調べて付箋に書き込んだり、他の役立つ表現を付箋に書き足したりして、校正に役立つように考えを深めさせた。

班内で他のグループの作品添削が終了後、自分の班の作品を校正する活動を行った。添削には2色の付箋を使用させた。それぞれ「文法エラー」「内容エラー」



図1 班内で他のグループの作品を添削する様子

と色分けさせることで、どの点に修正の余地があるか見てすぐ分かるようにした。本時の目標が、「他の班からの他の班の意見をもとにして、紹介文に新しい表現を書き加えよう。」であったため、他の班からもらった付箋に書かれているコメントを活用したり、班内で相談したりして、新しい表現を書き加えている様子が伺えた。

次時の学習で、修正を加えた作品をインディアナ大学の実習生(8週間滞在)からネイティブチェックを受けたり、音声指導を受けたりする場を設定したので、紹介文を書いて完成させるだけでなく、書いたものを正しく発音し、読んで相手に伝える学習教材としても位置づけることができた。本単元が終了したのちに、これらの紹介文は、現在文通交流しているアメリカのエッパス中学校へ郵送することになっていたため、意欲的に取り組んだ生徒が多かった。授業後の生徒の評価カードを見ると、新しい表現を書き加えることができたと言った生徒が多く、目標を達成したと感じているように伺えた。しかし、生徒が書いた付箋を指導者が見ると、修正した側にスペルミスがあったり、文法事項が違っていたり、アドバイスとして書かれた英文が違っていたりした。文法事項の定着のために、今回ピアサポートを取り入れて、生徒が主体的に文法事項と向き合うように工夫をした。結果として学習の深ま

りは得られるが、生徒同士が互いのエラーを指摘し合い、指導しあえるようになるには、まだ時間がかかることが分かったので、今後の指導課題としたい。

4. 実践事例 2

(1) 授業の構想について

① 題材について

○単元名 Warm Up A Speech and a Game

○指導者 村上直子

○学習者 中学3年

○実施時期 平成22年4月

本単元は、教科書の最初の課で出てくる。Show and Tellの言語上の最終目標は、「生徒が日本の、あるいは他国の名所について英語で紹介できること」である。そのため、教科書にあるモデルの例は比較的知名度の高い「自由の女神像」を取り上げている。何か品物を見せてそれについてかんたんに説明するという本活動は、発表能力を鍛えるためによく行われるものであるが、事前に、推敲して発表原稿を書かねばならない。書く活動から話す活動へつなげやすい単元である。この後の単元で、「私の日本文化紹介」というのがある。そこでShow and Tellのような、書く活動から話す活動へつなげさせようと考えた。そこで、今回は「何かを紹介する」というのを書く活動のみに絞って表現させることにした。

② 本活動の目標

○何かを紹介するとき、どんな情報（内容）を書いたらよいかを知る。

○自分の紹介したいものについて、正しい英文（表現方法）で書くことができる。

(2) 授業の実際

学習過程を、次の表2に示す。

表2 学習過程

学習事項	指導過程と留意点など
1. 学習課題への接近	<p>①教科書例文（自由の女神について書いてある）の内容理解をさせた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつ建てられたか ・贈った国はどこか ・高さや大きななど <p>②紹介する時にはどんなことを述べればよいのかを考えさせた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物の名称 ・どこにあるか

	・大きさ、重さ、色、などの視覚的情報
2. 学習課題の設定	③ワークシートを配布し、作品作りに取りかからせた。（授業中だけでは紹介したいものの情報がわからないという声もあり、宿題にして持ち帰らせた。）
3. 学習課題の追求	④提出させ、よりよい表現が使われている作品を指導者が選び、ワークシートに載せ、生徒たちへ紹介。

(3) 実践結果と課題

今回、「何かを紹介する」というテーマをもとに作文させたのだが、生徒たちからの提出作品を見ると、ワークシートにかなり「型」を意識させすぎた点があった。例えば文中には *It's one of the most famous ()*. という「型」があったため、「自分の紹介したいものについて書こう」と指示しておきながら、生徒が選ぶものは「有名なもの、知名度の高いもの」からならざるを得ないものにしてしまった。「英文は教科書にある例文に慣れさせたい」という指導者の思いがあったためであるが、生徒たち自らが紹介したいものを書かせたい、という目的から少しずれてしまった。

書く力を付けるためには継続的で繰り返しの指導がいると感じている。生徒たちは、自分で作った文の中に誤りに対し、指導者などからの訂正があっても、返却されると見て確認し、終わってしまうことが多い。そこで指導者は、いわゆる「書きっぱなし、間違えっぱなし」にさせない工夫が必要であろう。

添削した作品は、もう一度清書する機会を設けさせたい。自分が表現したいと選び、そして作成した文章は、何度かの修正を経て正しい英文になるまで書かせたい。そうやって型を覚えさせれば、教科書の基本文ばかりを暗記させるよりも、自分で英文を作成するときに必要な書く力として身に付くのではないだろうか。

また、できあがった作品を回収してじっくりと添削するということは、生徒たちの共通的な誤りに気づくことができる。今回は、*one of* の後に単数形が多かったこと、そして *go to there* や、*in there* のように前置詞の扱いのミスが多く見られた。授業だけでは、個々へ細かい修正や説明することはできなくとも、今後の英作文指導の際には意識して全体へ伝えられるし、生徒実態の把握にもなる。書かせた作品をチェッ

(2) 次の()内に、自分の紹介したい物を入れて、文章を完成させてみましょう。

Hello. I'm (). This is a picture of (Mt. Fuji).

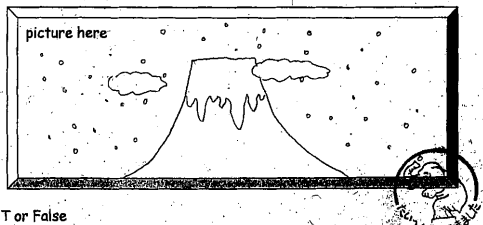
It's one of the most famous (mountains) in (Japan).

(さらにもう一文) It's visited by a lot of people.

(高さや長さなどの情報) The mountain is 3776 meters high.

(何かもう一文) And it's covered with snow in winter.

So I think very beautiful! Thank you.



(4) T or False

1.		2.		3.	
----	--	----	--	----	--

図3 生徒の作品1

(2) 次の()内に、自分の紹介したい物を入れて、文章を完成させてみましょう。

Hello. I'm (). This is a picture of (Lake Biwa).

It's one of the most famous (lakes) in (Japan).

(さらにもう一文) It is the largest lake in Japan.

(高さや長さなどの情報) This lake is 104 meters deep.

(何かもう一文) Many fish live in there!

Thank you.

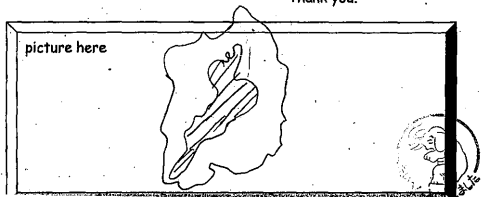


図4 生徒の作品2

クすることは時間がかかることであるが、指導者が生徒へ「正しく書かせる」ことについて注意しておきたい点、授業の中での説明不足、生徒が陥りやすいエラーなどを把握して分析できる機会になる。

5. おわりに

本研究は、創造的思考力の育成を図りつつ、書く能力を育成するための教材および学習指導開発を行ってきた。日々の指導を通して、生徒に書く力をつけるた

めには継続的で繰り返しの指導がいると感じている。指導者が生徒の書いた英文を添削し、返却すると、生徒は修正箇所を見て、そこで学習を終わらせてしまうことが多い。指導者にとっては、いわゆる「書きっぱなし、間違えっぱなし」にさせない工夫が必要である。今回の実践では、その工夫の一例として、文法事項の定着のために、ピアサポートを取り入れ、生徒が主体的に文法事項と向き合う機会を多く設定した。その結果、生徒同士で書いた作品を読み返したり、書き直したりする時間が増え、書いた作品を精選していく中で、よりよい表現を考えて書こうとする意欲が高まることが生徒の評価カードの記述で分かった。また、書く活動を個人で行った後に、グループで話し合って作品を仕上げていく活動を取り入れることによって、学力差へ配慮した指導を行うことができた。しかし、生徒同士が教え合い、読み返し、書き直しをするためには、やはりある程度の文構造の理解、文法の知識が必要となるため、適切な指導が必要になってくる。

今後も、学力差に配慮しながら、段階的に目標を設定して、書くことにおける適切な指導を行っていくとともに、学習効果についても検証していきたい。

引用(参考)文献

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』東京：開隆堂出版株式会社，平成20年，pp 6 - 19.
- 2) 松尾砂織・村上直子・深澤清治・松浦伸和「速読力を養う英語科の教材および学習指導開発」、『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』，第37号，pp423 - 428，2008.
- 3) 松尾砂織・村上直子・深澤清治・松浦伸和「速読力を養う英語科の教材および学習指導開発Ⅱ」、『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』，第38号，pp349 - 354，2010.
- 4) 村上直子・松尾砂織・柳瀬陽介・中尾佳行「生徒の学習ストラテジーのきめ細かな記述と分析-特に英単語習得と文法理解の改善を目指して-」、『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』，第38号，pp361 - 365，2010.